

令和元年度 日本大学スポーツ科学部 学部研究費 研究実績報告書

所属：スポーツ科学部 競技スポーツ学科
 資格：専任講師
 氏名：近藤 克之

<p>研究課題名</p>	<p>障がいのある子どものスポーツ活動を支援するアントラージュとしての親（保護者）の在り方に関する一考察</p>
<p>研究目的及び 研究概要</p>	<p>研究目的 本研究の目的は、障がいのある子どもが定期的にスポーツを行う段階においては、身近な支援者（アントラージュ）の存在が重要となることを踏まえ、障がいのある子どもと最も身近なアントラージュとしての親（保護者）がいかにスポーツを経験しているのかを、現象学を手掛かりにして記述的に探求することである。</p> <p>研究概要 ①本研究では、文部科学省の学習指導要領にも含まれ小学校の体育授業にて行われている、誰でも参加できるスポーツとして「Tボール」を取り上げている。 ②障がいのある子どもが参加できる「Tボール体験会」を企画実施し、参加者や保護者、支援者に対するアンケートや半構造化インタビューから得られた質的な情報を分析する。</p>
<p>研究実績の概要</p>	<p>研究の進捗状況 長年、障がい者スポーツ実施に携わられている支援者は、「地域単位で地道に地域の人たちと一緒にやっていかなくてはならない」と語っている。これには、障がいの有無に関わらず、同じスポーツに取り組める環境を設けていく重要性が示されていると思われる。普段、障がいのある子どもが、親子関係の中だけで取り組めないような身体活動を、様々な人が交流する中で、スポーツを通して行えることは、様々な波及効果が期待されるものと思われる。本研究においては、そのような人間関係または想いや願いが交差する現場を捉えることに臨んでいる。</p> <p>得られた成果 重度の障がいのある子どもの親御さんからは、「もしかしたら参加したら、迷惑になるかもしれないし、足手まといになるかもしれないし、なんか参加するのちょっと迷った」という声があった（逐語録 p269, 15 行目）。しかし、体験会実施後の参加者から「投げる・捕るの動作を段階的に教えてくれたのが良かった」（逐語録 p15, 271 行目）「我々が目の届かないところを、学生さんが（障がいの）重い人にも気にかけてくれて参加してやっぱり良かった」と言ってくれたと報告している（逐語録 p15, 273 行目）。さらには、「ああいう場で、自然に自分（親御さん）に重度の子どもがいるんだよ、こういう子どもがいるんだよということを小学生や高校生に分かってもらって良かった」という声や（逐語録 p15, 277 行目）、「そこから（障がい）理解が始まる」というアンケート回答もあった（逐語録 p15, 279 行目）。また、「次（の体験会）を行われる際に、別の人たちを誘ってくれるかもしれない（逐語録 p15, 280 行目）」という期待もあり、今回参加していない人へのきっかけづくりにも、体験会の実施は効果があると考えられる。障がいのある子どもを中心に、支援者としての親（保護者）の想いやスポーツ実施を支援する支援者との関係性の一部を捉えることができたと考えている。</p> <p>今後の課題 2020年にもTボール大会を実施する予定であり、上述した内容をさらに深化させるべく、障がいのある子どものアントラージュとしての親の在り方を事例的に整理していくことが求められる。</p> <p>研究実績 2020年度に論文として発表予定である。</p>